
メタモンではない。メタモンだ！！

ルルイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

メタモンではない。メタモンだ！！

【Nコード】

N4713U

【作者名】

ルルイ

【あらすじ】

気がついたらメタモンになっていた。

理由も分からず姿が変わっていて前の自分のことは思い出せない。ポケモンの世界に迷い込んだのかと思ったが、襲ってきたのはポケモンではない怪物。

だが、この怪物も何処かで見たような気がする。

まさか、俺はメタモンではなくメタモンだというのか！？

第一話 すべては突然から始まる（前書き）

デジモンにメタモンを突っ込んでみたくなりました。

第一話　すべては突然から始まる

気が付いたら、木々の間から差し込む光が見えた。

「なんだこれは？」

何故外で寝転がってるのだろうか、こうなるまでの直前の記憶が思い出せない。

目を覚ましたばかりで、頭がはつきりしないのだろうかと思ったり考え続けるが全然思い出せない。

とりあえず起き上がろう。

「あれ？」

起き上がったには起き上がったが、視界が異様に低い。

いや、起き上がったにしては視界が転がったようにしか見えなかった。

まるで仰向けで寝てた体勢から、顔だけ前を向いてうつぶせになったような。

そんなはずはない。

前向きに起き上がったのだから立ち上がってるか座り込んでる体勢になるはずなのだ。

体があれば・・・

「・・・・・・・・」

体の感覚はあるにはある。

だがいつもと感覚が違う。

なにがちがつて？ とにかくちがつのだ。

手足の感覚なんて当たり前すぎる感覚で普段は誰も気にするものじゃないだろうが、いまの俺にはその感覚が普段とまったく違うのだ。

とりあえず右手を見てみよう。

「・・・・・・・・」

紫色・・・・・・・・その上指がなくて丸っこい。

左手は・・・

「・・・・・・・・」

同じく紫色・・・・・・・・指がなくて丸っこい。

足のほうは・・・

「・・・・・・・・」

首があまり動かないのか地面しか見えず、足どころか体があるのかすら確認できない。

訳のわからない状態に周囲を再確認してみると、深い林か森の中のようなのだ。

木々の間から向こう側の様子も確認できず、木の幹しか確認できない。

ズサッ・・・・・・・・ズサッ・・・・・・・・

木ばかりかと思っていたときに、背後から足音らしき音が聞こえた。

森の中でまさか熊か・・・あるいは人かと思い振り返ると・・・

「・・・・・・・・」

さつきから沈黙が多いが、状況が状況だ。

目の前にでかいカマキリのような生物が居た。

いや、視界が低いのもあるが周りの木と比べてもありえないでかさだ。

その上、目の前でかいカマキリの両腕の鎌もありえない。

あれはどう見ても本物の刃物の鎌だ。

普通のカマキリの腕はトゲトゲしているが切れたりはない。

「オマエ、見慣れないやつだな。
俺の縄張りで何してやがる。」

しかもしゃべった！！

なおのことありえん、これは夢か？

夢とは思えないが、たとえ夢でもこの状況はまずい気がする。

目の前の巨大カマキリはどうも機嫌が悪そうだ。

理由は言ってることから分かるが、こんな危なそうな生物に遭遇するなら熊のほうが何倍もましだ。

とにかくここは・・・

「逃げる!!」

と、全速力でカマキリと真逆の方向へ逃げ出した。

だが、逃げるから追いかえるとよく言われるだけあって・・・

「待ちやがれ!!」

と、巨大カマキリが追いかけてきたようだ。

後ろを振り向いて確認する余裕はなかった。というより出来なかった。

でかいだけあって足音が大きいから追ってきてるのは分かったが、今の俺には後ろを振り向くことが出来なかったからだ。

何せ、俺は跳ねて逃げているのだ。

無意識に跳ねて逃げ出したが、どうやら今の俺には足が無い様で跳ねて逃げることしか出来ない。

自分の体のあまりの状況に悲観したいものだが、全力で逃げてる状況ではそんなこと考えてる余裕もない。

思ったより跳ねて逃げる速度は速いが、対格差からいつ追いつかれても不思議じゃない。

実際追いかけてくる声と足音がだんだん近くなってきている。

「待ちやがれ！！」

「食われてたまるかー！！」

「誰がてめーみてえな不味そうなの食うかー！！」

いまの俺は不味そうらしい。

食われはしないが、ただでも済みそうにもない。

このままでは追いつかれる！！

何処か隠れられそうな場所を・・・

「シャドウシックル!!」

直感が閃きか危機感を感じて横に飛ぶと、俺の居たところを三日月状の何かが通り抜けて前方の木に当たった。

木は三日月状の何かが当たったの部分からすっぱりと切れて地面に倒れた。

俺は木の横を駆け抜けながら確認し・・・

「じょうだんじゃない!!!」

いまの俺の体の状態がどうなっているのかまだ認識知れていないが、輪切りにされたらただではすまないのは確かだ。

というか死ぬる!!

命の危機を感じて、俺は全速力と思ってた以上の速度で跳ねながら駆ける。

だが、全力疾走も長くは続かなかった。

森の木々が突然途切れて、谷間が現れた。

飛び越えられそうな幅ではなく、すぐ手前で立ち止まった。

谷間の下には川が流れていて、流れはそこそ早そうだが飛び込めそうではある高さだ。

振り向けばでかいカマキリが木々を抜けてこようとしている。

考える暇もなく、俺は谷間の川に飛び込んだ。

が・・・

（泳げないーーーー！！！！）

跳ねて逃げることしか出来ない体の俺はとて泳ぐことまでは出来ないようだった。

「た、たすかった・・・」

幸い浮きやすい体だったようで、流れが少し緩やかになったところで浮かんで息をすることが出来た。

谷間も抜けて陸に上がれそうなところが見える頃には流れもだいぶ緩やかになって、何とかもがいて陸までたどり着いた。

陸に上がったとたんさすがに疲れてへたり込む。

「いったいどうなってるんだよ・・・」

自身の状況も把握できないまま、巨大なカマキリに襲われるわお
ぼれかけるわで散々だ。

結構流されたかと思ったけど、陸に上がった先はまた森が広がっ
ている。

かなり大きい森なのだろうか。

どうして自分がこんなところにいるのか。

いったいココはどこなのだろうか、余裕が出来て再び考え出す。

そして、ふと川の水で自分の姿を確認できないかと思った。

流れていて見難いかもしれないが、鏡などないので文句を言っ
ても仕方がない。

俺は川の水に自分の姿が映るよう覗き込む。

映ったのは紫色のボディにつぶらな瞳、無表情とも笑っていると
も取れる閉じた唇のない口。

どこからが頭でどこからが体かも分からない一頭身で柔らかそう
な不定形の体。

第二話 「コはどこの世界だ？」（前書き）

続いて投稿

第二話 ココはどこの世界だ？

メタモンだ、川の水を鏡にして前からしか見えないが、何処からどう見てもメタモンだ。

メタモンって飛び跳ねて走れるのか。それってDQのスライムじゃないのか？

まあこの手の不定形液体状モンスターはこのゲームでもいるけど。

アニメじゃナメクジみたいにウニヨウニヨと移動してなかったか？

と、試しに歩いてみると・・・

ウニヨウニヨ・・・

おお、移動速度はそれほど速くなさそうだが跳ねずに移動できた。足元が見えないからよくはわからないが、下がウニヨウニヨが動いているのがわかる。

こんなのが自分の体とは信じたくはないが、粘液状の何かが出てないだけましなのか？

「というか、ココはポケモンの世界なのか？」

鋭い鎌を持った巨大カマキリというとストライク？

だけどあのカマキリは鎌以外は顔も体もだいぶ違ったぞ。

ストライクの進化形？ いや、それはハッサムだろう。

それとも俺の知らないシリーズで出る新しい進化形のか？

いや、少なくともポケモンじゃないだろ………しゃべってたし……

いまの俺はメタモンなんだから言葉も理解できるのか？

だけどあの巨大カマキリはどうか別のところで見たとある気がする。

どこで見たんだ？ ポケモンとは違うまた別の……

ガサガサッ！！

ガサガサッ！！

と、そんな時、森の中から草を掻き分ける音が聞こえた。

また、あの巨大カマキリかと思い、身構えた。

現れたのは、

「ん？ あなたどうしたの？

ここに住んでるデジモンじゃないわね。」

二本足で歩いてる人型の花の様な生物だった。

こいつも何処かで見たことがあるような？

先ほどのカマキリのように敵意はないようだが、カマキリと似たようなことを言われた。

どうやらメタモンはココでは珍しいらしい……………って

「デジモン！？」

「……………デジモンでしょ？

あなた、ちがうの？」

いやいやいや、この姿はどう見たってメタモンだろ！！

それともメタモンに似た何かのデジモンか！？

確かに幼年期のデジモンだとプヨプヨしたメタモンに似た不定形のが多かったはずだけど！！

この姿はやっぱりメタモンだろう！！

それともデジモンだからか！？

デジモンだからメタモンで、メタモンだからデジモンなのか！？

デジモンに共通するモンがメタモンもあるからメタモンなのか！？

助かったと思って落ち着いたら新事実を知ってまた混乱してきた。

「????????へんな子ね。
いったいどうしたの？」

俺があたふたと混乱し様子を見て、花のデジモンが問いかけてきた。

まだまだ頭が混乱しているが現状把握が必要だ。

このデジモンにいろいろ聞いてみよう。

それにこのデジモンは・・・

「あ、いや・・・ちょっと道に迷ってな。

その上、川にまで落ちて困ってたんだ。

あんたは確かフローラモンだよな。」

「ええ、そうよ。

私はフローラモン。　この森に住んでるの。」

見ての通りの植物型で成長期のデジモンだったはずだ。

他の情報で属性とか必殺技とかもあるはずだが、そこまでは覚えてはいない。

デジモンには進化段階として幼年期？・幼年期？・成長期・成熟期・完全体・究極体がある。

例外的なデジモンも多数いるが、基本はこの進化段階の順に進化する。

アニメにおけるパートナーデジモンも大抵は成長期の姿がメインで、戦闘時に進化して戦う。

属性にもワクチン・データ・ウィルス種があり、確かワクチンが

ウイルスに強くて、データがワクチンに強くて、ウイルスがデータに強いという設定だったはずだ。

これにも例外が多数いるが、アニメではあまり気にされてなかった。でどこまで意味があるかわからないが。

「ところであなたは？」

わたしはあなたと同じデジモンは見たことないの。」

「え？ あ、俺か？」

俺は………」

俺ってポケモンなのか？

デジモンがいるんだからここはデジタルワールドのはず。

デジタルワールドにいつの間にか居て、いつの間になっっていたのはメタモン。

じゃあ、今の俺はデジモンなのかポケモンなのか？

まあとりあえずの自己紹介に俺は……

「俺はメタモンだ。」

フローラモンに連れられて、俺は森のデジモンたちが集まっている場所にきていた。

森の中だけあってフローラモンのような植物形デジモンが多い。

「ここがわたしたちの暮らしてる場所よ。

この辺りには食べ物がたくさんあるからみんなココに集まっている。」

「そうみたいだな。」

周囲の木々には食べられそうな木の実や果物がなっており、アニメで何度か見たことのある幼年期か成長期であろうデジモンたちが木の実を食べたりお互いにじゃれあったりして遊んでいる。

見ていると実に微笑ましいな。

デジモンは進化するほどカッコイイ、逞しい、恐いなどの力強いイメージになることが多い。

だが幼いデジモンの時はその殆どが愛らしくてかわいい印象を受ける。

アニメだと進化した後の力強いシーンが強調されてるからあまり意識してなかったが、実際に見てみるとかわいいデジモンを見ているのもいいと思う。

そんな風に様子を見ていると遊んでいた幼いデジモン達が、こちらに気づいてやってきた。

「ん、なんだ？」

「だれ？ だれ？」 「知らない？ 知らない？」 「なにもん？
なにもん？」

どうにも幼いしゃべりで話しかけてくる幼年期であろっデジモン。

どんな名前のデジモンか覚えてないが、どいつも丸っこいぷにぷにした感じをしている

どうやら見慣れない俺に興味を持ったらしい。

「俺はメタモンだ。」

「めたもん？ めたもん？」 「ぶよぶよいっしょ。 ぶよぶよいっしょ」 「あそぼ。 あそぼ。」

確かにいまの俺はプヨプヨだし大きさも近いが、さすがに幼年期ではないと思うんだ。

まあ、変身しなきゃ泡も吐けないんだが・・・

（ちなみに幼年期のデジモンの攻撃は泡であることが多い。）

「あー・・・・・・・・なあ、どうすりゃいい？」

「遊んであげてくれないかしら。」

ここの幼年期の子は、私みたいな上のデジモンが面倒見てるの。」

「「「あそぼ。 あそぼ。」」」

「ああ、わかったわかった。
遊んでやるから。」

子供らしいというべきか、幼いデジモンが俺の周りを跳ね回りながら催促してくる。

俺はしぶしぶだが幼いデジモンに連れられて跳ね回る。

というか、メタモンの姿の俺が跳ねてたら幼年期デジモンにしか見えねえ・・・

遊び終わると幼いデジモンたちは疲れて眠ってしまった。

その頃には日も落ちて夕方になっていて、俺もさすがに疲れていた。

この森には家というものもなく、幼いデジモン達は木の幹の下で寝ている。

俺も野宿になるだろうが、こんな森の中なのだから仕方がない。

食べ物があるだけマシかと、俺はフローラモンともらった果物を食べながら話していた。

「子供たちと遊んでくれてありがとう。」

「いいさ、俺もココがどこかわからない迷子だったしな。食べ物ももらえて腹も膨れた。」

俺は指のない腕の形を変えて果物を掴んで口に放り込む。

メタモンボディだけあって、変身しなくてもある程度体の形を変えられる。

手足がなくて不便かと思ったが、意外に器用なことも出来そうだ。

ただやはり体が小さいのが辛い。

幼年期デジモンと大差ないんだぜ。

フローラモンも最初は俺を幼年期デジモンと思ったらしい。

俺がしっかりと喋りをするので違うとすぐわかったらしいが。

まあ、変身すれば大きさも変えられる。

あとでいろいろ試してみるか。

「ところでココには小さいデジモンしか居ないのか？
ここにいるのは全部成長期までのデジモンだろ？」

周りのデジモンたちも夕暮れになってきて、それぞれ思い思いに
休み始めている。

「ええ、ココには成熟期以上のデジモンは居ないわ。
強いデジモンが居ないから、ここは弱い幼いデジモンが生活する
にはとてもいい場所だったの。」

「だったのってことは、今は違うのか？
見た限り、特に問題なさそうだが？」

「今はね……………」
最近、他所からスナイモンがやってきてこの森を縄張りにして住
み着いたの。

時々ココに来ては、暴れて果物を食べていくのよ。」

スナイモン？……………ああ、そういや。

「それってかまき……………両手が鎌のデジモンか？」

「ええ、そうよ。会ったの？」

「ああ、追い回されて川に落ちた。」

あのデジモン、スナイモンって名前だったな。

アニメでも何度か出てたのを覚えてる。

その回だけのチョイ役だったかな。

「気をつけてね。 ココで暮らすならあまり一人で森の中を歩かないほうがいいわ。」

スナイモンが森の中をいつも見回っているの。」

「ああ、わかった。 気をつける。」

フローラモンとの話が終わった後、暗くなったら皆寝てしまった。森の中だがそれほど木々に覆われた場所でもなく、空が見えて月明かりで辺りを見渡せた。

フローラモンにココで暮らすかと言われたが、そういうわけにもいかないだろう。

どうしてデジタルワールドに居るのか？ 何でメタモンなのか？

こうなる前のことを思い出そうとしてみたが、何が原因でこうなったのかさっぱりわからない。

その上なぜか自分の名前だけが思い出せない……

帰るとしたら人間界に戻るってことだが、このデジタルワールドから戻っても俺の住んでた世界かわからん。

アニメじゃシリーズごとにデジタルワールドもそれぞれ違っていた。

このデジタルワールドはどのデジタルワールドなんだ？

アニメに出てきた世界とも限らないし、ゲーム版や漫画版ってこともありうる。

どの世界でもないただ知らないデジタルワールドって考えるのが普通だ。

そうなる人間界に行く方法も、持つてる情報じゃあまり当てにならないかもしれない。

このデジタルワールドがどういう世界か知る必要がある。

この森に居たんじゃ、たいしたことはわからないだろう。

近いうちに出ていくことになるな。

デジタルワールドを旅することになると、やはり戦う手段が必要だ。

メタモンの変身能力を確認してみるか。

ゲームのポケモンにおけるメタモンの変身はレベルとHPを除いた対戦ポケモンの姿と能力のコピー。

能力値は同じでもメタモンのもとのHP≡体力はそう高くないので対戦相手より低いことが多い。

その上、最初に変身を行わないといけないので確実に後手に回る。

その為、ゲームにおいては育成されることは殆ど無く、タマゴ要員であることが殆どだ。(タマゴ要員についてはこの話には特に関

係ないので説明省略)

アニメや漫画では対戦ポケモンだけじゃなく、その場に居ないポケモンや人間、植物に無機物など擬態とも言える変身すら出来ていたはずだ。

実際、今の俺がどこまで出来るのかわからないが、傍には寝ているフローラモンが居る。

目の前に対象が居るなら恐らく変身可能だろう。

俺はフローラモンの容姿をしつかり目に焼き付けて、フローラモンの姿になる俺をイメージする。

(変身!!!!)

.....

.....

.....

.....何も起こらない。

俺は自分の体を再確認してみるが、メタモンのままだ。

何がいけなかったんだ？

やはりイメージするだけじゃダメだったか？

今度はこの軟体な体を実際に動かして変身しやすいようにしてみる。

もう一度・・・

（変身！！！）

・・・

・・・

・・・

・・・だが何も起こらない。

今の俺の体は人型の二足歩行が可能なフローラモンに似せて体の形を変えている。

つまり二本足で立っていて、更に腕が二本伸びてる形のメタモンなのだ！！

．．．．．笑えるか、不気味としか思えん。

それに二本足で立っている様に見えても、歩行なんてとても出来ん。

粘土の形を変えて立っているようなものだから、膝の様な関節がまったく働かないんだ。

これもだめか．．．

やはり心の中で念じるだけではダメなのか？

ならば今度は口に出して、

「変身。」

．．．．．

．．．．．

．．．．．

．．．さっぱり何も起こらない。

なぜだ！？ 何故変身出来ない！？

この体はメタモンではないのか！？

変身出来ないメタモンなど、！スライムにすら劣る存在だぞ！！

氣力が足りないのか！？

夜だから遠慮して小さめに唱えたのが不味かったのか！？

ならば俺の中に眠る全パワーを吐き出すつもりで叫んでやる。

さあ聞け！！ 俺の全力全開を！！

「変身！！！！！！！！」

「な、何！？ どうしたの！？」

フローラモンが目覚ました。 それ以外に何も起こらない。

「 悪い、フローラモン。 寝ぼけてたみたいだ . . . 」

「 そう、氣をつけてね。

あまりうるさいと小さい子が泣き出しちゃうから。」

起きたのはフローラモンだけで、他のデジモンたちは何事もなく寝てる。

フローラモンも、なんでもないとわかると再び眠りに付いた。

俺はふと夜空を見上げて輝く月を見つめる。

ふう………とため息をついて、

「変身できねえ………」

どうしようもなく行き詰った状況に俺ははんなば現実逃避を始めていた。

第二話 「」はどこの世界だ？（後書き）

もう一話続きます

第三話 メタモン進化・・・・・・・・・・じゃなかった、変身！！（前書き）

とりあえずここまで

第三話 メタモン進化・・・・・・・・・・じゃなかった、変身！！

「朝か・・・」

デジタルワールドに来た翌朝。

俺はフローラモン達が住む森の広場で目を覚ました。

昨夜はいろいろ試したが結局変身は出来ずに、そのまま不貞寝してしまった。

実は俺はメタモンに見えて、別物なのではないかと考えて何か技が出ないかと試したが結局何も出来なかった。

幼年期デジモンだって泡を吐けるんだぞ。

ポケモンで言う体当たりくらいなら出来るが、そんなもの実際には技でもなんでもない。

それに柔らかいメタモンボディじゃないした威力も無い。

まさか幼年期デジモンにまで負けたりしないよな・・・

こんなんじゃ森を出てデジタルワールドを旅なんて出来ないだろ。

昨日はいきなりスナイモンに会ったけど、危ないデジモンなんてそこら中に居るってことは無いだろう。

だけど戦う手段とまではいなくても、最低逃げられる手段をもっていないと。

悪いデジモンでなくても獰猛なデジモンは十二分に居るだろうし。

さすがにここに居るデジモンについてきてくれというのは無理だろう。

俺の都合で訳のわからない旅に付き合えというのもなあ・・・

どうしようもない八方塞な状況に、朝から気が滅入る。

「はあ・・・」

「おはようメタモン。」

ため息なんかついて、眠れなかった？」

ため息を漏らした後に、フローラモンが話しかけてきた。

昨日の夜の変身騒動で起こしてしまったから謝っておかないと。

「そういうわけじゃないさ。」

あと、昨日は起こして悪かったな。」

「それは別にかまわないけど。」

昨日何かあったの？」

「いや、なんでもねえよ。」

フローラモンに打ち明けてもどうにかなる問題ではないので誤魔化す。

すでに日はだいぶ昇っていて他のデジモンたちも起きだしており、昨日の幼いデジモンたちもまた遊びまわっていた。

滅入っていてもしょうがないと思い、気晴らしに俺はまた幼いデジモン達の相手をすることにした。

フローラモンも俺に何か追求することはなかった。

俺が昨日の幼いデジモン達と適当に相手をしていた時だった。

「スナイモンが来たぞー！！」

フローラモンとは違う成長期デジモンが広場に走り込んで来て、
思い思いに遊んでいた広場のデジモン達に向かって叫んだ。

フローラモンが言ってたな、時々スナイモンがやってくるって。

「うわー！！」

「かくれるー！！」

それまでのほのぼのした雰囲気はなくなって、皆慌てて草むらや
大きな木下に隠れていった。

俺もそれに従い幼いデジモンを連れて隠れることにする。

「ほら、お前らもとつと隠れるぞ。」

「うん、かくれる。」「すないもん、あばれる。」「こわい、こわい。」

子供たちもスナイモンのことは知っているのか。

俺と一緒に近くの草むらに隠れる。

広場が静まり返ってすぐココのデジモン達とはちがう大きな足音とともに、俺を昨日追い回したデジモン、スナイモンが現れた。

スナイモンは辺りを見渡しで、近くにあった木に成っていた果物を食べ始めた。

「あいつが来るといつもこうやって隠れるのか？」

「うん、かくれる。」「みんないると、あばれる。」「スナイモン、つよい。」

ここにいるのは成長期デジモンまでで、スナイモンは上の成熟期だ。

一対一じゃ勝てない上、成長期デジモンもココにはそう多くない。だから隠れてスナイモンが何処かいくのを待つしかないわけか。

スナイモンが食べ終わるのを仕方なく見ていたが、スナイモンが食べている果物の成ってる木から一匹の幼年期デジモンが落ちてきた。

運悪くスナイモンが食べる果物の木の中に隠れていたらしい。

「なんだちび、まだココに居やがったのか。」

「あ・・・ああ・・・・・・うわぁーん!!」

スナイモンに見つかって逃げ出しもせず泣き出してしまっ。

「ピーピー泣きやがってやかましい。
とつとココから出てけ!!」

そう叫ぶと幼いデジモンを躊躇なく蹴り飛ばした。

このままでは地面に叩きつけられると思い、飛び出して受け止めようかと思っただが先を越された。

蹴り飛ばされた子を受け止めたのはフローラモンだ。

「大丈夫？」

「ひくっ、ひくっ、・・・・・・うん。」

「あなたはどこかに隠れてなさい。」

「う、うん。」

幼い子が近くの茂みの中に隠れていく。

だけどフローラモンはその場でスナイモンに向き合ったままだ。

「スナイモン！！ もうココで暴れるのはやめなさい！！」

「なんだと。 俺の縄張りで何しようとか俺の勝手だ。」

「もともとこの森には住んでたのは私たちよ！！」

「この森は俺が支配したんだ。」

なんで弱いやつに従わなきゃいけないえ。

手前らはとっととココから出ていきな！！」

スナイモンがフローラモンに向かって鎌を振り下ろす。

脅して本気じゃなかったのか、フローラモンは簡単に避けた。

「こんの！！ アレルギーシャワー！！」

フローラモンの腕から花粉のような粉を放つが鎌に防がれた。

「手加減していればいい気になりやがって!!
シャドウシックル!!」

「きゃあ!!」

振り下ろした鎌から赤い斬撃が飛び出した。

フローラモンは屈んで避けて当たらなかったが、飛び出した斬撃が近くの木に当たって切れた。

成熟期の必殺技だけあって、成長期のフローラモンの必殺技とは比べ物にならない。

「俺を怒らせたんだ!! 只で済むと思うなー!!」

「くう!!」

頭に血が上ったスナイモンは鎌を振り回してフローラモンを追い立てる。

フローラモンは避け続けてるが、避けるたびに振り回した鎌が周りの草木を切り裂いて、近くに隠れていたデジモンが飛び出しては

逃げて再び隠れていく。

勝てるとは思えないのはわかるが、フローラモンだけを戦わせるのはどうなんだ!!

幼年期デジモンは多いが、フローラモンと同じ成長期も何匹いるってのに。

「仕方ない、お前たちココで隠れてろよ。」

「めたもん、どうするの?」「たたかうの?」「すないもん、つよいよ。」

「戦わないよ。やるのはせいぜい嫌がらせだ。」

そういつて、俺はスナイモンの見つからないように迂回して奴に近づく。

さっきも言ったが、俺には何の攻撃方法も持ってない。

できるのは体の形状を変身ほどではないが自由に変えられるだけだ。

スナイモンが暴れてる近くの木に登り、飛び掛るチャンスをつかがう。

俺みたいなやわらかい物体が飛び掛ったところでダメージを与えられないが、体を布のように伸ばして目を覆えば十分嫌がらせになるだろう。

その間にフローラモンや周りのデジモン全員で攻撃すれば多少はダメージを与えられるだろう。

逃げ回ってるフローラモンに釣られてスナイモンが近づいてきた。

よし、もう少し近づいたら飛び掛って奴の目を……………

奴の目を……………

目を……………

……………

（スナイモンには目がない！！！！）

スナイモンには頭もあるし凶暴そうな口もあるけど、目のあるところには模様のようなものがあるだけではつきりとした目がない。

いや、昆虫なんだから複眼なのか!?

目に当たる模様を覆い隠せば見えなくなるか?

そうこう考えているうちにスナイモンが俺が登ってる木の傍まで来ていた。

無茶を承知で待ち構えてたんだ、やるしかない。

「どうしてもなりやがれー!!」

勢いよく木の枝からスナイモンの頭めがけて飛び掛り、ベタンと貼りついた勢いのまましがみついた。

「のわっ!!」

「メタモン!?!」

飛びついたところで二人に気づいて驚きの声を上げる。

このまま振り落とされないようにしっかりとしがみつぐが・・・

「何だこいつは、昨日見かけた奴じゃねえか。
俺の頭から離れやがれ!!」

スナイモンは特に慌てた様子も無く、俺の姿を認識して振り落とそうとする。

悪い予感どおり目隠しにはなっていないようだが、このまま簡単に振り落とされたら無茶した意味も無い。

【D A G - C O D E C O P Y】

何だいまのは？

突然男とも女とも取れない機会音声が聞こえた。

いったいどこから・・・

「メタモン、離れて!!
危ないわよ!!」

「お、ああ・・・わ、わかってるよ。」

だが、お前一人を戦わるわけにもいかねえだろ!!」

突然の音に驚いて呆然としたが、フローラモンの呼び声でしっかりする。

どうやら両腕が鎌のスナイモンには自分の頭の上が届かないらしく鎌を無理に動かそうとしている。

とりあえず嫌がらせにはなっているらしい。

「てめえとつとと離れやがれ!!
ぶった斬るぞ!!」

「ハッ!! 鎌が届かねえのにどうやって斬るってんだ。
そう簡単には振り落とされてやるつもりはねえ!!」

振り落とそうと更に首を大きく振っているが、俺も振り落とされまいと全力でしがみつく。

先ほどの機会音声は気にしてる余裕が無かった。

「このっ!! このっ!! 調子に乗りやがって!!
ならこれでどうだ!!」

頭を振るのをやめたかと思うと、突然スナイモンが木に向かって

頭を振りかぶる。

俺ごと木に頭突きをする気だと思い、慌てて離れようとした時、

【COMPLETE】

再び聞こえた機会音声と共に、俺の中で何かが動いたような感覚がした。

「な、なんだ今は・・・って、「ドゴンッ！！」「グエッ！！」

違和感に意識を向けてしまったことで対応が遅れて、木に頭突きで叩きつけられた。

そのままスナイモンの頭から地面に落っこちた。

「大丈夫メタモン！？」

「お、おう・・・体が柔らかいおかげで思ったほど痛くは無かったぜ。」

メタモンじゃなかったら今ので死んでた気がするぞ・・・。

だけど、また聞こえた機会音声と今度の違和感。

俺の中で何かが起こった気がする。

というか、機会音声は俺の体の中から聞こえた。

俺はスナイモンがまだいるというのに意識を自分の体の中に向ける。

そうすればこの状況を何とか出来る理由も無い核心を感じて。

そして体の中にあつた違和感をしっかりと把握して、外へ引つ張り出す。

柔らかいメタモンボディの中から出てきて、手にしたものは・・・

「 아이폰? 」

「 なにそれ? 」

体の中から出てきたフローラモンが問うたそれは、今流行のタッチパネル式携帯電話、 아이폰 (i P h o n e) のようなものだった。

何か違うような気がして画面のない裏側を見てみると何か書かれていた。

「えっと・・・DAGIVICE-I・・・って、デジヴァイスー！！！」

【METAMORPHOSIS】

俺が叫ぶと再び機会音声が鳴り、 아이폰のようなデジヴァイスが周りを覆い隠すほどの強く、そして暖かな光が放たれた。

「うお！！ 眩し！！」「きゃ！！」「な、なんだ！？」

俺と近くにいたフローラモンとスナイモンが強烈な発光に目を眩ます。

発光が収まって目を開くと、周りの景色が違って見えた。

目の前に立ち塞がっているスナイモンは自分と同じ大きさに見え、周りの木々も小さく見えた。

そして全身に感じるこれまでとまったく違う違和感。

体を見回すと両手にデカイ鎌、緑色の外骨格、複数の足。

今の俺の姿はどうやらスナイモンらしい。

「変身……できたのか？」

「メ、メタモン？……」

下のほうからフローラモンの声が聞こえた。

スナイモンに変身して大きくなったからだ。

俺の足元にいるフローラモンを見ると……

「……だれ？」

羽のない鳥に仮面をつけたようなデジモンがいた。

少なくともこの森では見てないデジモンだ。

「フローラモンよ。今はキウイモンだけど。

あなたメタモンよね、あなたも進化したの？」

「いや、俺は進化とはちょっと違うんだが……
というかなんで進化してんの？」

「わかんないわよ。」

あなたが出した物が光ったと思ったら、突然進化したんだもの。」

俺の？デジヴァイスが光ったらフローラモンが進化？

じゃあ、フローラモンは俺のパートナーデジモン？

ていうか俺、今人間ですらないんだけど・・・

「し、進化しやがったのか、こいつら・・・・・・・・」

あ、居たんだスナイモン。

突然いろいろあつて驚いてたから一瞬忘れてた。

「とりあえず、あいつを森からたたき出すぞ。」

「ええ。進化した今ならスナイモンとも戦えるわ。

あ、今あなたもスナイモンなのよね。」

「これまで通りメタモンでいい。

じゃあ、いくぞ！！」

俺が先行して両手の鎌でスナイモンに切りかかる。

「クソッ!!」 ガァン!!

スナイモンも両手の鎌を振るい、お互いの鎌がぶつかり合った。

ぶつかりあった反動で俺とスナイモンはお互いに距離をとり、

「自分の技、食らいな!! シャドウシックル!!」

「なめるなあ!! シャドウシックル!!」

お互いに放たれた赤い斬撃がぶつかり合う。

変身で得た技だけあって、威力は同じでお互いの技が打ち消された。

だがスナイモンが相手しているのは俺だけじゃない。

「リトルペッカー!!」

「グァ!!」

キウイモンの口からキウイモンを小さくデフォルメしたような弾が撃ち出されスナイモンの命中する。

技をまともに食らったスナイモンはよろけてその場に膝を着いた。

「あなたの横暴もこれまでよ、スナイモン。」

「とつとこの森から出て行きな。」

二対一で完全に優位にたつた俺達が警告する。

「くっ、くそ!! シャドウシックル!!」

「シャドウシックル!!」「リトルペッカー!!」

「グハア!!」

警告を聞かず苦し紛れに放たれたスナイモンの技も、俺達が同時に放った技が打ち破ってスナイモンを吹き飛ばした。

「ち、ちくしょー!!」

勝ち目がないと判断したのか、スナイモンは捨て台詞を残して森から飛び立って行った。

「……勝ったな。」

「ええ、メタモンのおかげよ。」

「俺だけじゃどうなったかわからねえよ。」

実際、変身した俺の能力値はスナイモンと同じはずだ。

戦い方次第でどうにか出来る可能性はあるが、戦い慣れてない俺一人じゃ勝てなかっただろう。

しかし、何で俺がデジヴァイスを持ってるんだ？

変身もどうやらデジヴァイスを使わなきゃ出来ないみたいだし。

(いったいどうなってるんだ?)

第三話 メタモン進化・・・・・・・・・・じゃなかった、変身！！（後書き）

書くのが遅いのでそこは勘弁してください。

しかし無駄に設定にこつてる気がする。

気楽なコメディが書いてみたい・・・

第四話 カワイイ、カワイイよルナモン（前書き）

題名どおりルナモン登場。

第四話 カワイイ、カワイイよルナモン

スナイモンとの戦闘から一週間、俺は森を抜けて旅に出た。

その間にスナイモンがまた襲ってくることもなく、森は平和を取り戻していた。

今後、別のデジモンが襲ってきてても今はフローラモン……いや、キウイモンがいるので心配ないだろう。

キウイモンは別に俺のパートナーデジモンでもなんでもなかった。どうやらデジヴァイスの力の余波がきっかけで進化したらしく、そのまま退化することもなかった。

アニメでもパートナーじゃないデジモンがデジヴァイスなどの影響で進化することは多少はあった。

試しに森のデジモン達にもデジヴァイスの力で進化しないかやってみた。

ちなみに俺の意思でデジヴァイスは光るらしく、やはり俺の物らしい。

結果だが、進化したのは森のデジモンの中の一割くらいで、特定のデジモンが進化するなどの共通点も特になかった。

恐らく経験値的な何かが一定以上内とデジヴァイスの力を使っても進化できないのだろう。

普通にデジモンが進化するにしても十分な経験と時間が必要で、デジヴァイスはそれをある程度補うかきっかけを与える力があるの

だろう。

だけどそれはあくまで副次的なもので、デジヴァイスの本来の力じゃない。デジヴァイスはアニメではパートナーデジモンとの繋がりを果たす役割がメインだ。

まあシリーズごとにいろいろ付随機能が違ったりフロンティアじやパートナーデジモンもいなかったけど。

俺のデジヴァイス・・・ディーアイはいろいろと多機能なようだ。（ディースリーやディーアークってデジヴァイスもあったし）

- ・デジヴァイスに向けた相手の情報を読み込むアナライズ機能。
- ・周囲の環境は地形をサーチして記録するマップ機能。
- ・なぜかこれを経由しないと使えない変身機能。

その他、形状から見てわかる 아이폰 としても使えるような機能が多数あった・・・というか把握し切れなかった。

今の携帯は多機能すぎてろくに使わない機能が多すぎる。

俺もメタモンになる前は持っていたけど、電話やメールやネットくらいしかろくに使ってなかったぞ。

今後重宝するであろうデジヴァイスだからいろいろ弄って調べたけど、一部はどうやらプロテクトがかかってたりして、こういう機能なのかもわからないものがあった。

まあ重要と思える機能は大体把握できたので問題はないだろう。

特に先ほど言ったメタモン本来の変身機能。

どうやら他のデジモンと接触することでデジモンのデータ＝デジコードをコピーして記録しそこから始めて変身が出来るようだ。

メタモンなのにデジヴァイスを使わなきゃいけないのは納得いか

ないが変わりにいいこともあった。

一度コピーしたデジコードは保存しておけて、俺の意思でいつでも変身が出来るんだ。

ゲームでは目の前にいる相手にしか変身できないメタモンよりはかなり便利だ。

デジコードをコピーするには進化段階ごとに多少時間がかかるよ
うだ。

森のデジモンに協力してもらって比べてみたが、幼年期と成長期はほぼ一瞬だけど唯一成熟期のキウイモンは数秒ほどかった。

スナイモンの時は慌しかったからどれくらいか覚えてないが同じくらいと考えていいだろう。

もし完全体のデジモンと出会った場合、戦闘中にコピーするのは時間がかかって難しいかもしれない。

変身機能はこんなものだが、もう一つ特記する機能はデジモン収容機能。

確かアニメのセイバースとクロスウォーズのデジヴァイスに付いていた機能のはずだ。

ココはデジタルワールドなので出歩く時にデジモンを隠す必要もないので特に使うことのない機能だ。

ならば何故この機能を挙げたのかというと……

「いい加減下ろしてくれ、ルナモン。
重いだろ？」

「大丈夫だよ。メタモンは重くないよ。」

中にパートナーデジモンのルナモンが入っていたからだ。

ちなみにルナモンは今俺を抱えて歩いている。

なぜ抱えているのかというとスナイモンとの戦闘後にデジヴァイスを調べていた一週間前のことだ……

戦闘後、俺は割りと簡単にスナイモンの姿からメタモンの姿に自分の意思で戻れた。

進化とは違い自分の意思で姿が変わったりするものだから森のデジモン達にいろいろ聞かれたりスナイモンがいなくなって喜んだりで大騒ぎだった。

騒ぎがある程度収まったら、俺はデジヴァイスの機能を確認するためにいろいろ弄っていた。

傍にはその様子を見ているキウイモンが居る。

「キウイモンはほんとに退化する様子は無いんだな。」

「ええ、普通は進化したらそのままだと思っただけど。何でメタモンは退化しちゃったのよ？」

「これは俺本来の変身能力だ。」

俺自身まだ把握し切れてないから良くわかんないけど、普通のデジモンと違って進化したわけじゃない。

それにこれ、デジヴァイスって言うんだけど持ち主のパートナーのデジモンを進化させる機能があるはずなんだ。」

デジヴァイスを弄りながらキウイモンに見せる。

アイフォンぽいだけあって画面にはアイコンが複数映っておりタッチパネル式で操作できる。

側面には何かの接続端子や音量調整っぽいボタンとカメラのレンズが付いている。

デジヴァイスなのだから何らかのデータを読み取るスキャン機能もあるんだろう。

「じゃあ、私がメタモンのパートナーなの？」

「いや、パートナーなら進化は一時的なもので時間がたてば戻ってしまうはずだ。」

キウイモンに進化出来たのはデジヴァイスは切欠で、すでに進化できるほどの力が十分備わっていたんじゃないか？」

「そうなんだ。でもおかげで進化できたし、これからはスナイモンみたいなデジモンがまた来ても皆を守っていけるわ。」

「ありがとうメタモン。」

「礼はいらない。」

進化はただの偶然だったし、俺自身こいつの機能を調べてる最中なんだ。」

「何がわかったの？」

「今のところデジモンの情報がわかるアナライズ機能と、行った所の周囲の地形を記録するマップ機能かな。」

マップ機能はこの森しか記録されてないけど、アナライズ機能は十分使える。」

試しにキウイモンを対象にアナライズ機能を使ってみる。

デジヴァイスに表示された情報をキウイモンに見せる。

【キウイモン 世代／成熟期 種類／古代鳥型 属性／データ

必殺技／リトルペッカー 通常技／ノーズマトック

一時期は絶滅したといわれていたデジモンだが、一部の生き残りがいた。やさしい性格でお面以外の体がむきだしになっているため、身を守れないことにつけこまれて絶滅してしまった。頭に生えている草のような部分がエネルギー発生装置で自分で栄養を作り出せる。必殺技は体内に隠れているチビキウイモンが嘴で突いたり自爆したりするリトルペッカー】

「……………これが私の情報？」

「……………そうらしいな。」

「身を守れないことをつけこまれて絶滅って……」

「皆を守る前にまずは自分を護らなきゃな……」

なんとも言えない解析結果に気まずい雰囲気になる俺たち。

とつとこの解析結果を画面から消して、アナライズ機能から別の機能に切り替える。

その直後デジヴァイスの画面が輝き、何かが飛び出して俺を吹き飛ばした。

「のわっ！！ な、なんだ!？」

「メ、メタモン!？」

気まずい解析結果を消したかったために不用意にわからない機能を使ったから対応し切れなかった。

といったもデジヴァイスの中から何かが出てくるとも思っていなかったがな。

飛び出てきた何かは今俺の上に乗っかっている。

「メタモン、やっと呼んでくれた」

「お前は？　　というか退いてくれ、動けん。」

前にも言ったがメタモンボディは非常に小柄だ。
幼年期デジモンと殆ど同じなので、大抵のやつより小さい。

「あ、うん。 えっとね、あたしルナモン。
メタモンのパートナーだよ。」

上から退くと同時に俺を抱えながらルナモンはそう言った。

といった感じに、ルナモンはデューアイの中から現れた。
何でデューアイの中にいたのとかは俺と同じでいつの間にか気づいたらということ、それ以前のことは何もわからないらしい。
わかっているのは俺がルナモンのパートナーだってことだけだ。

ところでこのルナモン、非常に甘えん坊な性格なのか良く俺にく

つついてくる。

体の大きさの差で殆ど俺が抱えられている状態だ。

変身していいいかとも思ってたんだが、変身している状態は通常よりやはり体力を消耗するらしい。

スナイモンなどの成熟期の姿は割りと体力を消耗するが、森のデジモン達にコピーさせてもらった成長期の姿でも元々の姿よりは体力を徐々に消耗するらしい。

道中いつデジモンと戦闘になるかわからないから無駄に体力を消耗しないように変身せずにいる。

おかげでルナモンにはずっと抱えられっぱなしだ。

メタモンの姿で歩いても別にそれほど移動速度は遅くないんだが、ルナモンが抱えることを求める。

何度か拒否しているんだが、そうするとルナモンがううと不満で泣きそうな顔をするものだから断れないんだ。

いやだつて可愛いんだよ、無邪気に甘えてきて無茶苦茶俺になつてゐるんだよ！！

べつたりくつついてきてちょっと邪魔だなーって思うこともあるけど、迷惑そうな顔をするとかめんなさいって謝って遠慮するんだよ！！

とってもいい子なもんだから俺もつい甘やかしちゃうんだよ！！
出会って一週間でルナモンの性格を把握して思いつきり仲良くなつたと自身があるね！！

熱弁したがルナモンとの関係は非常に良好だ。

甘やかしちゃってルナモンの頼みを拒否できないことが多いが割と楽しくやっている。

「んー？ メタモン、何か音が聞こえる。」

「そうなのか？」

「うん、なんだか戦ってるみたい。」

ルナモンには何か聞こえたみたいだが、俺には聞こえていない。
非常に耳がいいらしく、これもルナモンゆえの性質らしい。
ちなみにルナモンのアナライズ結果はこれだ。

【ルナモン 世代／成長期 種類／哺乳類型 属性／データ

必殺技／ルナクロー ティアーシユート ロップレイヤーリップル
月の観測データと融合して生まれた、うさぎのような姿をした
哺乳類型デジモン。 大きな耳でどんな遠くの音も聞き分けること
が出来、臆病だが懐きやすい寂しがり屋。 必殺技は闇の力が込め
られた爪で引っかけルナクローと、力を額の触覚に集中して綺麗な
水球を敵に放つティアーシユート。 耳を回して発生させたシャボン
の渦で敵を巻き込むロッピーヤーリップル。】

すっかり耳が良いとも懐きやすいとも書いてあったな。
だが可愛いんだから仕方ないよな。

っと、今はそんなこと考えてる時じゃなかったな。
どっか近くでデジモンが戦ってるのか？

「ルナモン、戦ってるのってどっちの方向かわかるか？」

「わかるよ、あっち。」

「ちょっと見に行ってみるか。」

「大丈夫？」

「遠くから様子を見て、危なそうなら逃げれば良さ。」

俺たちが対処できるのは成熟期までだ。

完全体なんかが戦ってたら逃げるに限る。

究極体なんかだったら見つかったらどうしようもない。

まあ、究極体なんてそんなにごろごろいやしないだろう。

そういうわけで俺とルナモンは戦闘音が聞こえるほうへ向かった。抱えられたままだと身動きが取りにくいから俺も自分で歩いたが、ルナモンは不満そうな顔をしていた。

可愛くても甘えん坊過ぎるところは少々困る。

ルナモンの耳を頼りに戦闘が行われてる場所に着てみると、二匹のデジモンが戦っているのが見えた。

一体は赤い恐竜型の確かティラノモン、もう一体は黒いサイのよ
うなデジモン。

片方が思い出せなかったがとりあえずディーアイでアナライズする。

【ティラノモン 世代／成熟期 種族／恐竜型 属性／データ
必殺技／ファイヤーブレス 通常技／スラッシュネイル、ダイノ
キック、ワイルドバスター

有史以前の世界に存在した古代の恐竜のようなデジモン。発達した2本の腕と巨大な尾で全ての物をなぎ倒す。知性もあり、おとなしい性格のため、とても手なづけやすい。必殺技は身体の色と同じ、深紅の炎を吐き出すファイアーブレス。】

【モノクロモン 世代／成熟期 種族／鎧竜型 属性／データ
必殺技／ヴォルケーノストライク 通常技／グランファイアー
鼻先にサイの様なツノを生やした鎧竜型デジモン。その巨大なツノは成長すると体長の半分をしめるほどの大きさになる。ツノの部分と体の半分を覆う硬質な物質はダイヤモンドと同質の硬度を持ち、このツノを持ってして貫けない物は無いと言われている。モノクロモンは攻守共に優れているデジモンといえる。草食性で性格は比較のおとなしいが、ひとたび怒らせるとその重戦車の様な体から恐ろしい反撃を繰り出してくる。必殺技は強力な火炎弾、ヴォルケーノストライク】

「ああ見えて、結構おとなしいデジモンなんだね。」

「そうらしいが、暴れまわってる様子からは想像もつかないな。」

情報では基本的に大人しいらしいが、眼前では思いっきり暴れまわっている。

お互いを攻撃しているので敵対しているのかと思えば、相手を気にせず周りのものを攻撃したりもしている。

どうにも怒り狂って手当たり次第に攻撃しているように見える。

「あ、メタモン。あそこにもデジモンが隠れてるよ。」

「ん、どこだ？」

ルナモンが指差すほうを見ると、大きめの岩の隙間から何かのデジモンの尻尾らしきものが二本見えた。

【ガジモン 世代／成長期 種族／哺乳類型 属性／ウィルス

必殺技／パラライズブレス 通常技／ピットフォール

鋭くて大きな爪を生やしている哺乳類型デジモン。哺乳類型では珍しく2足歩行をするタイプで、恐らく前足を腕のように使用するうちに前足の爪が進化し、2足歩行をするようになったのだろう。小型のデジモンではあるが非常に気性が荒く、決して人間にはなつこととしない。前足の爪は攻撃する際にも非常に有利だが、以外にも穴掘りに向いており、いつも落とし穴を掘っては、他のデジモンが

穴に落ちるのを楽しんでいるイジワルな性格。必殺技はガス状の毒息を吐き出すパラライズブレス】

隠れてるのはガジモンらしい。

成長期のデジモンならあの戦闘に巻き込まれたくないだろうからな。

もしかしたらティラノモンたちが暴れてる理由を知ってるかもしれないな。

「ちょっとあいつらが暴れてる理由を聞いてみるか。」

「あ、メタモン待つて〜。」

二匹のガジモンが隠れてる岩陰までいき、ルナモンも後を付いてきた。

「おい、お前ら。何であのティラノモン達が暴れてるか知ってるか。」

「な、なんだオマエ!?!」

「静かにしろよ!! あいつらに見つかるだろ!!」

「お前ら、あいつらに何かやったのか?」

「俺達じゃねえよ、エテモン様が・・・」

エテモン？ 確かサルのデジモンだったか・・・

「そのエテモンがどうしたんだよ。」

「お、俺達とあいつらはついこの間までエテモン様に従っていたんだ。」

「けどエテモン様選ばれし子供達にやられちゃって、従う必要がなくなったらあいつら暴れだしちゃって。」

「俺達、扱き使われてたからな！」

「選ばれし子供達だって!？」

選ばれし子供達でエテモン・・・そうだ思い出した!!
デジモンアドベンチャーだ!! 記念すべきデジモンアニメの第一作!!

ココはデジアドの世界なのか、もう十年以上前の放送だからエテモンだけじゃ思い出せなかった。

というか、細かいストーリーなんて殆ど思い出せないぞ。

エテモンは確か二体目のボスで最初のボスがデビモン、この後がヴァンデモンだったかな？

ヴァンデモンは確か続編の02のラスボスでもあったよな。

まあ時間にしたら数年後のはずだからそれは気にしなくてもいいのか。

とにかく今このデジタルワールドに選ばれし子供達がどこかにいるわけ。

正直今は行く当てもない気ままな旅。 アドベンチャー それならいつそ冒険してみるか!!

「よしわかった!! じゃあ、あいつら止めてやるからその選ばれし子供達のこと詳しく教えてくれ。」

「エテモン様がもういなくなったから教えるのはかまわないけど・・・」

「お前らじゃとてもあいつらに勝てるようには見えないぞ。」

そりゃアルナモンは成長期だし、俺にいたっては幼年期にしか見えない。

だが俺には変身があるし・・・

「問題ない、あいつら位なら何とか倒せる力はある。」

手伝ってくれるかアルナモン？」

「うん、ちょっと恐いけどメタモンのためならがんばる。」

可愛いなコンチクショウ!!

こんなこと言われたら戦わせたくなくなるが、俺一人じゃさすがに二体同時に相手するのは難しい。

一体は何とか抑えてもらわないと。

「それじゃ、初めての実践いつてみるか!!」

「うん!!」

デイーアイを構えると俺の意思を汲み取ってデジヴァイス本来の力が発動する。

【EVOLUTION】

「ルナモン進化!!レキスモン!!」

【レキスモン 世代/成熟期 種族/獣人型 属性/データ

必殺技/ムーンナイトキック ムーンナイトボム 通常技/ティアーアロー

驚異的なジャンプ力を身に付け、素早い動きで相手を翻弄する獣人型デジモン。月の満ち欠けのように、つかみどころのない性格をしてるが、その佇まいはどこか神秘的である。必殺技は、両手の“ムーングローブ”から発生させた催眠効果のある水の泡を投げつけ、敵を眠らせる「ムーンナイトボム」と、背中突起から美しい氷の矢を引き抜いて放つ「ティアーアロー」。また、空高く跳躍し、急降下キックを繰り出す「ムーンナイトキック」も強力である。」

ディーアイの光ると共にルナモンはレクスモンに進化した。
別にこれが初進化というわけじゃない。

この一週間の間にディーアイの機能の一つとして何度か試していた。

まだ成熟期までしか進化できないがいずれ更なる進化をする可能性があるだろう。

だけどルナモン、進化してもかわいいな！！

レクスモンはルナモンの時とは違ったかわいさで、一体で二種類
のかわいさを味わえる。

完全体に進化したらどうなるんだろう。とても期待している。

「デ、デジモンを進化させたー！」

「選ばれし子供達と同じ！？」

「まあ、進化させるのは選ばれし子供達の専売特許って訳じゃない
ってことだ。」

実際アニメシリーズでも主人公達以外にもデジモンを進化させる
ことの出来るやつはそこそこ出てたはずだ。

もっとも進化させてレクスモンだけに任せる気はない。

「レクスモンはモノクロモンを任せていいか？
俺はティラノモンを止める。」

「わかった。メタモン気をつけて。」

。レキスモンに進化するとちょっと喋り方が硬くなるんだよね・・・

中の性格は変わってないらしくて、モノクロモンに向かっていく前に俺を一回抱きしめてった。

今生の別れのような行き方をするな・・・。

「じゃ、俺もいくか。 変身!!」

【MATAMORPOHSIS】

「キウイモン!! ってな。」

スナイモンになろうかと思ったが、あの鎌じゃ殺傷能力高そうだからキウイモンに変身した。

コピーさせてもらっという良かったぜ。

「こっちも進化したあ!？」

「どうなっただあ!？」

ガジモン達は驚きっぱなしだ。

まあ、俺も自分が変身してることに一週間前は驚きだったがな。

「じゃあ、行くぜティラノモン!!」

『G A a a a a a a a a!!』

俺の接近にティラノモンが吼えて威嚇した。

少し……いやかなりビビリそうになるがレクスモンを戦わせてるんだ。

逃げるわけにはいかない。

キウイモンの体はティラノモンに比べて小さいがその分小回りが利く。

それに足だけしかない分、脚力は結構あるのでかなりすばしい。

その足で俺はティラノモンの周りを走り回ってかく乱する。

『G u . . . G u G A a a a a a a!!』

かく乱は効いているらしく首を右へ左へと回して戸惑っていたが、突然口から炎を吐き出す。

だがやはり狙いが定まっていらないらしく俺は避ける必要も感じずに、攻撃で動きの止まったティラノモンの背後に回りこみ……

「ノーズマトック!!」

『G A A A a a a a a a ! ! ! ! !』

キウイモンの鋭いくちばしで突き刺す技をティラノモンの尻尾に叩き込んだ。

今度は痛みで叫び声を上げるティラノモンは前方によろける。

だがすぐ踏みとどまって振り向き俺のほうへ突進してきた。
更に興奮して我を忘れちゃったようでもいいのだ。

「リトルペッカー!!」

『G A G u u u u u ! ! !』

リトルペッカーがティラノモンの顔面に決まり、そのまま後ろへ仰向けに倒れて動かなくなった。

体が崩れて消えたりしてないから、気絶しているだけだろう。

デジモンの体はデータだから死ぬと体が崩れて死体が残らない。

かわりにデジモンのタマゴ、デジタマに戻ってその場に残るか始まりの街とかいうところに送られて生まれ変わるんだ。

アドベンチャーの世界では始まりの町があつたはずだ。

それよりもモノクロモンはどうなったかな？

レキシモンが手間取っているなら手を貸そうかと思いつている
ほうを見る。

……特に手を貸す必要はなかった。

モノクロモンはすでに倒れて眠ってしまった。
レキスモンの技にムーンナイトボムという技がある。
催眠効果のある水の泡を投げつけ敵を眠らせる技だ。
恐らくモノクロモンはその技を受けて眠っているんだろう。

そうこうしているうちにクレスモンがこちらのほうに戻ってきた。

「大丈夫だったか、クレスモン。」

「うん大丈夫、メタモンは？」

「見ての通りだ、思った以上に楽しかったよ。
こいつら大人しくさせたしガジモン達のところに戻るぞ。」

「わかった。」

聞くべきことは選ばれし子供達がどこへ行ったのか。
正直アドベンチャーのストーリーなんて殆ど覚えてねえ。
直に見てた世代だったし、もう10年以上前だぞ。
だから彼らが今どこで何をしているのかを知っても、その後どうなるのか殆ど思い出せないだろう。
だが選ばれし子供達が世界の流れの中心にあるのは間違いない。
俺もデジヴァイスを持っている以上付き合ってみるのもいいだろう。

人間に戻り元の世界に帰る方法とかは探すこと自体あまり考えていない。

アドベンチャーの世界だってわかったところで元の世界に戻る方

法なんて心当たりがない。

ならこの世界で生きていく為に力をつけていく事を考えたい。

選ばれし子供達についていけばいろんなデジモンと戦ってデジタルワールドを救うのだろう。

共に戦い、力をつけて世界を救うを手助けするのもいいだろう。

ルナモンも進化させてやりたいしな。

第四話 カワイイ、カワイイよルナモン（後書き）

最初パートナーはエレキモンにしようかと思ったのですが、進化系がはつきりしなかったので代わりのデジモンを探してたらルナモンの存在を発見。

デジモンのゲームのほうはあまり知らなかったのではじめて知りました。

最初に言った通りかわいいです。

デジヴァイスはフロンティアでは形態が変化したものだったのでそれを流用。

아이폰みたいな多機能高性能電子機器にしました。

メタモンの成長と共にデジヴァイスの機能を拡張させていく予定です。

ところで設定に懲りすぎて少し話が停滞がち。

もっとさくさくストーリーを進めたいな・・・

そついうわけで少し書き方を変えながら進めていこうと思います。
亀の更新でしょうがよろしく願います

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4713u/>

メタモンではない。メタモンだ！！

2011年7月23日15時15分発行